

人魚の死

野村胡堂

—

「ガラッ八、俺をどこへ伴つれて行く積りなんだい」

「まア、黙もって蹶ついてお出でなせえ。決して親分が後悔するようなもの、お目に掛けないから——」

「思おほし召めいは有難いが、お前の案内じゃ、不気味で仕様がねえ。又丹波笹山で生捕りしましたる、八尺の大鼬おおいたちなんかじゃあるまいネ」捕物の名人銭形の平次と、その子分の八五郎、野暮用で亀戸へ行った帰り、東両国の見世物小屋へ入ったのは、初夏の陽も、漸く蔭を作りかけた申刻みなつ（四時）近い刻限でした。

ガラッ八が案内したのは、讃州志度の海女あまの見世物、竜王の明珠めいじゆを取った、王朝時代の伝説にかたどり、水中に芸をさせるのが当って、その頃江戸中の評判になった興行物の一つでした。

小屋は筵張むしろばりの全く間に合わせの代物しろもの、泥絵の具で存分に刺激的に描いた、水中に悪竜と闘う美女の絵を看板に掲げ、その下の二つの木戸口には、塩辛声の大年増と、二十五六の巖乗な男が、左右に分れて客を呼んでおります。年増女は如何にも達弁にまくし立てますが、男の方は至いたって無口で——もつとも、兎口みくちのせいもあったでしょう、木戸札きどふだを鳴らして、無暗に「入らっしゃい、入らっしゃい、サア、今が丁度宜いところ——」と言う言葉を、何の知恵もなく、こわれた機械のように繰り返しております。

「ガラッ八、俺にこんなものを見せる気かい」

平次はさすがに立ち止まりました。この奇怪な空気に、少し当て

られ気味でしょう、好い男の眉が、心持擧みまます。

「親分、だまされたと思つて入つて御覧なさい。そりや面白いから——」

ガラツ八は、平次の手を引くようにして、一步、小屋の中へ入りました。

中は五六十坪、筵張りの見世物にしては広い方ですが、その真ん中に、十坪あまりの真四角な水槽みずぶねを据えて、少し不透明な水が満々と湛えてあります。今の言葉で言うプール、昔はそんな事を言いませんが、小屋の粗末なのに似ず、これだけは、まことに嚴重です。

水槽の上が小さい舞台になつて、その上に、お松、お村という二人の美女——これが一座の花形で、床几しょうぎに腰を掛け、紫の対ついでの小袖に、赤い帯を締め、お松は三味線を鳴らし、お村は篠笛しのぶえを吹いております。

どちらも十八九、どうかしたら二十位はたちでしょう。讃州志度から伴れて来た海女あまというにしては、恐ろしい美人です。お松はやや細っそりして上品な顔立、お村は脂の乗った豊艶な身体、どちらも、明眸皓齒めいぼうこうし、白粉おしろいつ気も何にもないのに五体から健康な魅力を発散するような美しさ、江戸中の見世物の人気をさらつたと言うのも無理はありません。

舞台には、二人の美女の外に、麻袴あさがみしもを着た口上言いが一人、月代やきと鼻の下に青々と絵の具を塗つて、尻下がりの丸い眉を描いておりますが、顔立は立派な方で、身のこなし、物言い、妙に職業けいしやう的な軽捷けいしやうなところがあります。

水槽の前には、青竹を繞めぐらして、後ろへ次第に高くなつた、急

造の客席の上には、観客がかれこれ二三百人。

「ね、親分、この不景気に、十二文の木戸を払ってこれだけ入るんだから——」

ガラッ八は自分のことのように揉手もみでをしております。

「手前てまえのような人間が多勢いるんだね、世間は広いやな」

そう言いながらも、銭形の平次も、この一種異様な見世物に心を牽ひかれなわけには行きませんでした。

お松、お村の二人の美女が暫く三味線と笛の合奏を続けながら、流行唄——少しも讃州らしい匂いのない、江戸の流行唄はやりうた——を二つ三つやると、やがて、達弁な口上の声につれて立ち上がりました。

「いよいよこれから竜王の珠取り、藤原の淡海公に契ちぎった海女は一人だがこちらの海女は二人、いずれ劣らぬ美しいのが、水底深く潜って、竜王の明珠を取って来る。この水槽は、こう見えても、底は竜宮まで通じている——嘘だと思ったら、遠慮なく飛込んで見られるが宜い——」

そんな事を言って笑わせている間に、お松お村の二人の海女は、赤い帯を解いて、クルクルと裸体はだかになりました。

裸体に——というのは、文字通りの裸体です。明治大正になってからも、鳥羽の海女が幾度か東京へ来て、浅草公園や上野の博覧会で海中の作業を見せましたが、これは風俗上の問題から中形の浴衣か何かを着せて、真当ほんとうの裸体は客に見せませんでした。銭形平次が活躍している頃の江戸には、そんな取締規則などはありません。東西両国にはもつといかがわしい見世物のあった頃、海女の裸体などを見て、驚くような敏感な人間はなかったのです。海女と言っても、お松、お村は、室内の水槽で芸をするように



©2017 萩 柚月

育って、陽にも潮にも焼けず、小屋の空気が匂うばかりの白い肌を、何の惜気もなく衆目にさらして、水槽の縁に立ちました。緋縮緬ひぢりめんの腰巻が一つ、その裾が風に煽あおられるのを小股に挟んで、両手で乳を隠すと、丈なす黒髪が、襟から肩へサツと靡なびきます。小屋を埋むる客は、この刺激的な情景に動揺どよみを打ちました。「成程ガラッ八、こいつは手前てまえが夢中になりそうだ」平次も少し引入られ気味に、そんな事を言って、水槽の左右に立った美女の、素晴らしい姿態に眺め入りました。

二

やがて、口上言いの男が、二た口ふたぐちの短刀を持出して、お松、お村に一本ずつ渡しました。見たところ如何にもよく切れそうで、

美女の裸身と、ひどく面白い対照になります。一つは短刀を受取るために、二人はどうしても乳房を隠した手を離さなければならなかったためでしょう。小屋一パイの客は、妙に興奮して、バラバラと気の揃わない手を拍っております。

やがて口上言いが、白扇はくせんを開いて、

「いよいよ海女は水底深く潜って竜王の顎あぎとを探ります。明珠は、お松、お村、どちらの手に入りましょうや、暫くは一と囃し——」

と言うと、二人の海女は、身を跳らして、碧玉へきぎょくを湛たたえたような

——少し底濁りのした水槽へサツと飛込みました。揚幕の中からは猛烈な囃しの音、特に銅鑼どらを叩いている、五十恰好の親爺は、妙にソワソワした様子で、首だけ出して水槽を覗いております。これは一座の太夫元、木戸にいる大年増の亭主で藤六という男、無人の一座で、女房は木戸番を、亭主は下座げざを勤めているのだと、後で判りました。

二人の海女は、暫く人魚のように、水槽の中を泳ぎ廻りました。一人が浮けば、一人が沈み、一人が拵え物の木彫の竜に近づけば、一人がそれを妨さまたげ、碧い水の中に、黒い髪、白い肌、紅くれないの腰巻が乱れ合って、これはなかなかの観物です。

「ネ、親分、こいつは面白いでしょう」

独り者のガラツ八は、すっかり夢中になって、この巧みな興行物のエロテイシズムに酔いしれます。

水槽は十坪ほどの二つに仕切って、奥の四坪ほどのところ、水中にやや浅く木彫赤塗の竜を沈め、その深い口の端きんぱくに金箔を置いた宝珠を含んでおります。二人の海女が盛んに泳いでいるところと、竜を沈めたところの間には荒い格子の仕切りがあって、格子

の底の方には、僅かに人間が潜れる穴が開いております。水は思いの外深いらしく——、いや深く見せるために、少し濁ったままにしてあるのでしよう、格子の底の穴のあたりは、朦朧もうろうとして、上からはよく判りません。

お松とお村は、暫く水中に争いましたが、やや肥ったお村の方が勝って、お松を弾き上げると、身を沈めて格子の穴を潜り、竜の顎あごの珠を取って、勝ち誇った両手を水の上へ高く挙げました。右手には閃らめく短刀、左手には燦爛さんらんたる珠。

小屋の中には、ドツと歓呼があがり、口上言いの男は、舞台上を上を、道化どうけた様子で、ピヨイピヨイと跳び廻ります。

最後の観物みものは、二人の娘が、すっかり濡れて、水から這い上がったところでした。海藻みくのように雫しずくする黒髪、真珠のように輝く肌、そして、濡れた緋縮緬の腰巻が、娘の美しい曲線を包んで、若さと、艶かしさを発散する趣おもむきは、まことに比類もありません。

「ネ、親分、面白いでしょう」

少し興奮した顔を撫でて、こんな事を言うガラツ八かえりを顧みて、「馬鹿だね、十手が懐中から、ハミ出すじゃないか、少し顔の紐を締めて、外の風に当って見ろ」

平次はサツと木戸の外へ出ました。

「だって親分」

「だって糸瓜へちまもあるものか、あの小屋の中には、妙に気に入らねえところがあるよ。兎に角、江戸っ子の見るものじゃねえ」

二人はそんな事を言いながら神田へ辿りました。

その翌る日、真昼まごのつを少し廻った頃、平次の家へ、

「親分、た、大変」

ガラッ八が転げ込んで来ました。

「何だ、相変らず騒々しい」

「落着いていちゃいけねえ、親分、大変なことになっちゃったんだ」

「お前の大変には懲々こりこりしているよ、その度毎たびに泥足で飛上がったり、煙草盆を蹴飛ばしたりするんだから——」

そう言いながらも、二の句が継げないほど息を切らしているガラッ八を見ると、平次も少し緊張した心持になります。

「親分。今日のは現にあっしがこの眼で見えて来たんだから嘘も偽いつわりもねえ。あの両国の海女あまが水槽へ飛込むと——」

「何だと——、又あの見世物へ行ったのか、馬鹿な奴だ。この間から変だ変だと思ったら、間がな隙がな抜け出しちゃ、木戸番へ十手の房か何かを見せびらかして、只であの海女を見ていたんだらう」

「そんな事はどうだって構やしない、親分、毎日行って見ているお蔭で、今日と言う今日は、飛んだものを見てしまったんだ。——

海女が一人殺されたんですぜ」

「何だと、ガラッ八、もう少し詳しく話してみろ」

海女が殺されたと聞くと、職業意識が目覚めて、平次は急にシャンとなりました。

「それお出でなすった。親分がそう来なくちゃ話が出来ねえ」

「生意気な事を言わずに、海女の殺された話をしろ、無駄を抜きにして」

「——こうだ親分、今日もいつもの通り、巳刻（十時）過ぎに小屋を開けたが、間もなく一パイさ、大した人気だね」

「それが無駄だよ」

「まア、黙って聞いて下さい。——いつもの通り芸題は運んで、昼少し前に、お松とお村が水槽に飛込む段取になった。口上言いから短刀を受取って、勢いよく飛込んだまではよかったが、お松が格子の下の穴を潜（もぐ）って、木彫の竜の方へ抜ける時、どうしたか、サツと水が真赤になって、恐ろしい泡が浮くと、お松の身体は水の中でノタ打ち廻って、格子の下の穴に引っ掛っているんだ」

「フム……」

思いの外の物凄い話に、平次も釣り込まれて眼をすえました。

「その恐ろしかった事——、黒い髪が藻（も）のように揺れると、白い肌（から）に絡んだ赤い腰巻が、水の中でメラメラと燃えるように動いたぜ。時々お松の顔が上にネジ曲げられると、恐ろしい形相で何やらを睨んだが。あの顔は忘れようたって忘れられる顔じゃねえ」

「それからどうした」

「漸く穴を抜けて竜の側へ浮いたが、力が尽きたか、直ぐ沈んだ。水槽の水は見る見る真っ赤だ」

「もう一人のお村は？」

「格子の手前へ、ボンヤリ浮いたが、手にはまだ短刀を握っていた。一と目、お松のものがき苦しむ様子を見ると、追っ駆けられるように水槽の縁へ這い上がり、舞台へ転げ上がると、そのまま目を廻してしまつたが、赤い雫（しずく）が垂れそうで、一時はこの女も斬ら

れたかと思つた——」

「それからどうした」

「口上言いの男が着のみ着のまままで飛込んで、下からお松の身体を抱き上げると銅鑼どらを叩いていた男が上から手を出して引上げた——が、もういけねえ、虫の息さ」

「傷は——」

「胸から腹へかけて、真一文字に割かれていた、その物凄かつた事」

「何か物を言つたか」

「何も言わねえ。傷は深いし、水は呑んでいたし、引揚げると、唇くちびるを二三度動かしたつきり、息が絶えた」

「——」

「ネ、親分、あつしは、あんな物凄いものを見たことがねえ。見物は逃げ出す、女子供は泣き叫ぶ、いやもう地獄のような騒ぎだ。一応十手を見せて、太夫元に木戸を閉めさせ、一座の者の足留めをして、ここまで飛んで来たんだが、親分すぐ行つて下さるでしようね」

「馬鹿野郎」

「へエ」

「お前は一体何だ」

「へエ、——これでも人間——」

「馬鹿ツ、人間の端くれは判っているが、ツイこの間お札ふだを頂いで、それでも一本立の御用聞になつたばかりじゃないか」

「へエ」

「へエじゃないよ、十手捕縄を預かる立派な御用聞が、殺しの現

場を見て、驚いて飛んで来る奴があるか」

「平次の子分の八五郎は、血を見て腰を抜かして、親分のところに飛んで行ったと言われちゃ、お前めえばかりの恥じゃない、第一、そこを空っぽにして飛んで来て、下手人が逃げ出しでもしたら何とするんだ」

「へエ——」

「もう一度両国へ引返しな。俺は一切構わないから、お前一人で眼鼻をつけて、下手人を挙げて来い、馬鹿野郎」

平次の以ての外の気色けしきに、ガラツ八はすっかり面喰らってしまいました。

「そう言われると面目次第もねえ、だがネ親分、あつしは腰を抜かしたわけじゃねえ。あつしの力には及びそうもなかったし、一つは親分の手柄にさして上げたかったんだ」

「馬鹿野郎、お前なんぞに手柄を譲って貰いたくはねえ、トットと引返しゃあがれ」

「帰りますよ、何も、馬鹿野郎、馬鹿野郎ッて言わなくたっていいでしょう、こう見えたって——」

「その積りで下手人を捕つかまえて来い、殺しの現場を見て、指を銜くわえて引下がる奴があるものか」

「——」

ガラツ八は黙って飛出しました。こう言われると、義理にも下手人を縛って来なければ、世間へも親分へも顔向けがなりません。

「誰も外へ出た者はあるめえな」

「へエ」

太夫元の藤六は、米櫃こめびつのお松に死なれた上、うんと儲かっていた小屋にケチが付くのを心配して、すっかり萎しおれ返っております。幸か不幸か、まだ検屍の役人は来ず、この辺を縄張しおにしている石原の利助も、他行中たぎょうちゆうとあってまだ駆けつけません。

ガラツ八の八五郎は、出来るだけ威儀を整えて、新米の御用聞に許される範囲で、一と通り調べ上げて見ました。

太夫元の藤六夫婦は相模さがみのもの、小才の利いた番頭の清次の入知恵で、水心のある美女を二人雇い入れ、讃州志度の海女という触れ込みで、この見世物を始めたのでした。

清次と言うのは、口上言いの男で、元は三崎の漁師りょうしで、少し位は文字も読め、才知たくまも逞しく、こんな道化した様子をしておりすが、顔を洗って、胡粉ごふんを落したところを見ると、なかなか好い男であります。

お松とお村はどちらも相模女、二人共負けず劣らず美しくもあり、負けず劣らず浮気でもあり、近頃は、土地の遊び人で、原庭の才三というのに熱くなって、女だてらに、鞆当さやあてをしていると言う噂もありました。

その他は、江戸で臨時に雇入れた囃方はやしかたと、木戸番の兎口みつくちの百松だけ、これも相模生れのお松と同郷で、お松には充分気があるようです。至って無口な上、自分の顔の醜みにくいことを百も承知をしておりますから、若い女と口をきくのさえ遠慮しているような肌

合の男だったのです。

こう調べるまでもありません。お松が死んだ時、水中にいたのはお村だけ、それも竜の彫刻ちようしやくに通う入口を争いながら水槽の深みの中に、短刀を握ってスレスレにいたのですから、お村より外に、お松を殺せる条件を握っている者は一人もありません。

こんな工合で、平次がわざと避けて、この事件から手を引いたのは、ガラッ八でも立派に解決が出来ると思つたせいでしょう。ガラッ八が袂の中の捕縄まさぐを爪探つていると、恰度ちやうど、石原の利助がやって来てくれました。近頃はすっかり角を折つて、平次は勿論ろん、ガラッ八にも厭な顔を見せない利助は、一伍一什いちぶしじゅうの様子を聞くと、一も二もなくガラッ八の意見に賛成してしまいました。

「そいつは、考えることも、迷うこともあるものか、お村とか言う女を縛つて、兎も角八丁堀の旦那に引つ叩いて貰うんだ」
その場を去らせず、こうしてお村は縛られてしまったのです。しかし、これが大変な間違いだったことは、三日も経たないうちに解りました。お村はどんなに責められても、お松を殺したとは言わないばかりでなく、考えれば考えるほど、事件があやしくなつて来たのです。

第一お村の持っていた短刀は、切れそうには見えるが刃退はびきで、女の手で人間一人殺せるほどの業わざをしそうにもなく、お松の傷は、胸から腹へかけて、真一文字に割きかれたもので、刃退の短刀や、女の手などでは、とてもそんなに斬れる道理はありません。

第二が、お松とお村が水中に争う型にはなりましたが、それは振付のある極った形で、何の無理も不思議もなく、お松が斬られたのはお村の方が上へ浮いている時で、お松の腹の方へ手が届く

筈もありません。

何百人の眼が見ていたので、これは少しの間違ひもないことで、お村の無罪は火を見るよりも明かです。どうかしたら、お村は短刀を二本用意していて、よく切れる方を、どこかへ捨てたと考えられたいことはありませんが、お村は水槽みずぶねから這い上がると、裸体のままで眼を廻したのですから、そんな物を持っていなかったことは明かで、水槽はその日のうちに血潮の交った水を流して、塩磨きにして洗い清めたのですから、もう一本の短刀を水中へ捨てて来なかった事も明かです。

吟味与力、笹野新三郎も、これではお村を下手人として、奉行所のお白洲へ突出されません。ひどく落胆する利助とガラツ八が叱って、兎に角、一応お村を許して帰しました。

それが事件のあつてから三日目です。

五

「親分、かくの通りだ。何とも面目次第もないが、知恵を貸して下さい。あつしが恥を掻く位は何でもないが、笹野様もことの外の御心配の様子だし、石原の親分も、緑町の藤六の家で、どんな事をして、親分を伴れて来るようになって、首を長くして待っていないさる——」

ガラツ八にそうまで言われると、平次もこの上動かずにいるわけには行きません。

「それはむずかしそうだ。俺が行ったところでどうにもなるまいが、兎に角、顔だけでも出して来よう」

そう言いながら、神田から緑町へ、ガラッ八と一緒にやって来ました。

緑町の藤六の家というのは、一種の合宿所で、太夫元の藤六夫婦を始め、一座のお村、番頭の清次、木戸番の百松、それに、死んだお松と一緒に、小女を使って暮している家でした。

「銭形の親分、お待ち申しておりました。よくお出で下さいました」

藤六は外そらさない顔で奥へ案内すると、

「おお、銭形の、待っていたよ」

石原の利助も、ホツとした様子で迎えてくれます。

平次はガラッ八の口や、世上の噂で、大体の経緯いきさつは知っておりますが、念のために、藤六や清次の口から、もう一度、人と人の関係や、その日の朝からの細かい出来事や、いろいろ訊ねました。

「木戸番の百松——とか言うのが、殺されたお松に気があったとか言うのは本当ですかい」

「それはもう、百松とお松は三崎の生れで、子供の時から知っているそうですし、百松は心の底からお松を慕っていたようですが、お松の方では何とも思っていないなかつたでしょう。女の眼から見れば、そんな事はいくら隠してもよく解りますよ」

藤六の女房は、平次の問とにこう答えます。

「ところで、その水槽へ飛込む時、誰が珠を取るか、前から決っていたらどうか、それとも行き当りばったりに、最初に穴を潜った者が取ることになっていたのか」

平次の問は次第かくしんに核心かくしんにふれます。

「それは前から決っています。そうでないと、水へ入ってからマゴマゴして間違いを起しますから」

とこれは太夫元の藤六です。

「あの間違いのあった日は、蓋ふたをあけて、すぐだったと言うから、お松が珠を取ることは前から、解っていたわけだね」

「左様で御座います。最初はお松、次はお村、三度目はお松——とこれは毎日同じことで、朝の第一番に珠を取るのは、一つ年上のお松に決まっております」

「ところで、今晚は百松とお村が見えないようだが——」

平次はフト思い付いたように、四方あたりを眺めました。

「百松は毎晩小屋へ泊っています。ろくなものもありませんが、火の用心のためで」と清次。

と清次。

「お村は？」

「お村はどこへ行ったろう。疲つかれているからって、奥で休んでいた筈だが、夕方から見えないようだね」

これは藤六です。

「お村さんは、先刻百松さんと一緒に両国の方へ行きましたよ」
お饒舌しゃべりらしい小女は、お勝手の方から口を出しました。

「何？ 百松と一緒に行った。おかしいなア、お役所から帰されたばかりで、疲れ切っているから、暫く休みたいって言っていたくせに」。

「お村さんは厭がっていましたよ、明日にしてくれって、——すると百松さんは怖い顔をして、グングン引っ張って、両国の方へ行ってしまったよ」

小女のいうことは、銭形平次を一番驚かしました。

「それは大変だ。ことによると、間に合わないかも知れない」
サツと起ち上がると、

「どうしたんです、親分」

と続いて、藤六、ガラッ八、清次——。

「お村の命が危ない、皆んなも後から来てくれ」

言い捨てて夕闇ゆうやみの中へ、平次の姿はサツと消え込んでしまいました。

六

「お村、俺の言うことが解るか——解るなら、返事をしろ」

兎口みつくちの百松は、見世物小屋の舞台に、蠟燭ろうそくを取って立ち上がり
ました。

前には、後ろ手に縛られた女、言うまでもなくそれは、今日お
松殺しの疑いが晴れて、役所から帰されたばかりのお村です。

「ハッ、ハッ、ハッハッ、成程、猿轡さるぐつわを嚙かませていたんだっけ、
それでは返事も出来まい——なアに返事なんかどうでも宜い。俺
の言う事が解つたら、首をしゃくりやそれで宜いんだ」

空洞うつろな笑いが、ガランとした小屋に響いて、その物凄さと言う
ものはありません。乱れた髪の上から、猿轡さるぐつわを食はまされ舞台の上
に引据えられて、紅くれないの裳もすそを乱くしたお村は、顔を変えてゾツと身顫みぶる
いしたようです。

百松は、万筋まんすじの単衣まんすじを端折はって、舞台の上に跣かみましました。蠟燭
をかかげると、縛はられたお村の顔よりは、自分の醜怪しゅうかいな顔の方が、

灯りの真ん中へヌツと出ます。

「お村、お前はお松を殺したに違いあるまい。うんにゃ、隠したつて駄目だ。お上の眼を晦ませても俺の眼は誤魔化せねえ。あの水の中で、鮭のように腹を裂かれて死んだお松だ、一緒に水槽に浸っていたお前が殺さなくて、誰が殺すんだ」

「――」

「お前も知ってるだろう。お松と俺は、同じ村に生れて、餓鬼のうちからの友達だ。大きくなったら一緒にって、田圃の積藁の蔭で、飯事をしながら約束したこともあるが、大きくなると、お松の阿魔、俺の見つともないのを嫌って逃げ出しゃあがった」

「――」

「俺はそれを迫っ駆けて、二年越江戸中を探し廻り、漸くここにいることが解ったんだ。どうせ、俺はこの通り見つともねえ人間だ、お松のような綺麗な娘に好かれる道理はねえから、浮気も不身持も承知、決して不服も、焼餅も言わないから、その代り、一生側へ置いてくれ、俺はお前の美しい顔を眺めて、犬のように守ってやる――つてこう言ったんだ。俺のやった事を、男の恥だつて言う者もあるだろうが、俺の身になると、外に工夫も手段もねえ、俺はどんな目に逢っても、どんな事をされても、お松の側にいたかったんだ――」

醜怪な百松の眼からは、ポロポロと涙が、拳骨を伝わって舞台の板を濡らします。お村は黙って眼ばかり光らせました。生捕られた獣のように、隙もあらば逃げようとしながらも、この男の恐ろしい熱情的な物語に、女らしい好奇心は十分に動かしているようです。

「そのお松を殺したお前を、どんな目に逢わせて敵を討とうか、俺は三日三晩考えた、なア、お村」

「——」
「もう少しの辛抱だ、騒ぐなよ」

立ち上がると、お村を縛った縄を解いて、その儘逃げ出そうとするのを、膝の下へ引据えて、引き捲るむしように、帯を解いて、着物物を脱がせてしまいました。

「——」

あれさるくつわツとも言えません。猿轡さるくつわをはめられて、虫の如く蠢うごめくお村の裸体。あの水槽の中に飛込む時と同じ、赤い腰巻のままを、もう一度キリキリと縛り上げ、かねて用意したらしい石の重りをつけると、

「この中で存分にもがけ、お松の弔とむらいだ、俺はお前が死ぬまで見物してやる」

サツとお村の身体を、水槽の中へ投込むと、一度床の上に立てた蠟燭ろうそくを取って、頭の上へ高々とかかげました。

水は今日入れ代えたばかり、碧玉ひよくの如く澄んで、蠟燭の光に底まで読めます。その中をお村の裸体は、重りに引きずられて、ユラユラと沈んで行きます。

お村は必死と身をもがきますが、何の甲斐もありません。海藻をかき乱したような黒髪の、水肌を慕うように揺ゆめく中に、白い顔が恐怖と苦悩に歪んで、二つの眼ばかりが、星の如く輝きます。くねくねともがく身体、それに絡からまる緋縮緬ひぢりめん、水に射す灯を受け、なんとと言う恐ろしい見物でしょう。

「ヘッ、ヘッ、いくら海女あまが商売でも、こう半刻も置かれちゃ叶

わねえだろう」

乾ひからび切った笑いが、又へラへラと小屋の天井に響いて四方へ鬼気を撒き散らします。

七

そこへ平次が飛込みました。半狂人のようになった百松を取って投げると、着物を脱ぐ間もなく飛込みましたが、お村を助け上げる間もなく、上から、百松が手当り次第、棒、箱、小道具を投げつけます。

「えッ、何をする」

と言ったが、手の付けようがありません。幸いそこへ、ガラッ八、利助を始め、藤六も清次も駆けつけ、百松を取って押えて、水の中から平次とお村を上げました。

平次は元より無事、お村も水には馴れておりますから、幸いです。だ命には別条ありません。

この騒ぎが一と片つきますと、ありったけの蠟燭ろうそくを灯して、舞台の上へ円くなった人達が期せずして平次に問いかけました。

「お村に聞くと、百松はお松の敵を打つつもりだった様ですから、百松がお松殺しの下手人のようでもありません。一休誰がお松を殺したんでしょう」

太夫元の藤六は、少し長い顔を引延ひきのばして、皆んなの顔を代表します。

「俺にも解らない」

「へエ——」

平次の予想外の答えに、みんな呆氣あっけに取られてしまいました。「この水槽の水を出してしまつたら、何か嗅ぎ出せるかも知れないが」

「宜しゅう御座います、銭形の親分、どうぞ御自由に水をお抜き下すつて——」

藤六は、そう言いながら、ガラツ八に手伝つて貰つて、三重になつている、水槽の樋といを開きました。

水は恐ろしい音を立てて、下水から大川に落ちる様子。

半刻ばかり経つと、水槽の底がすっかり見えるようになります。「もう宜いだらう、利助兄イ、すまないが、ここから逃げ出そうとする者があつたら、誰でも構わず引くくつてくれ」

「よし、心得た」

「それから蠟燭を——」

平次は蠟燭を片手に、木彫きぼりの竜の側にある段々を踏みました。

「お松を殺した刃物は、ここにある筈だ、もしここに何にもなかつたら、お松は水の中で鎌鼬かまいたちに逢つたとても思わなきやアなるまい」

平次はそう言つて。竜の口へ手を差し入れました。顎あごの大きい牙きばの間には箔はくを置いた珠を挟んでありましたが、竜の身体はどうせ一本の木へ刻きざんだのではなく、板を集めて寄木よせぎにしたもので、口から腕を入れると、狭いながら、胴までその手が入つて行きま

す。「あつたあつた」

固唾かたずを呑む人々の前へ、鞞さやも柄えもない、小型のヒ首ひが一口ふり、妙に薄曇つて物凄く光ります。

「柄を外して中身だけ抜いて使ったのは伶俐だ。——この通り、水の中に三日入っていても、人を一人殺した刃物は血曇がある、刃退きのピカピカする短刀とは違う」

平次は独り言のように言いながら、水槽の中の段を踏んで、底に降り立ちました。

「矢張り思った通りだ」

「——」

大勢の首が、水槽の中を覗くと、下から平次は、

「格子の潜りの下に、短刀を立てる穴が穿うがつてある——、この通り」

蠟燭をかかげて身を開くと、上からも手に取る如く見えます。水槽を二つに仕切った格子の潜りの真下に、幅二分、長さ七八分、丁度短刀のなかごを逆に立てるほどの、真新しい穴があいているのです。

平次は竜の口から取ったヒ首あいくちのこみをその穴にはめると、ヒ首は丁度床に植えたように、物凄い刃先を上にしてピタリと樹たちます。

「あッ」

上から覗いている者の口々に、恐ろしい感歎の声。

「そこで下手人は誰だ——」

と石原の利助、鋭い眼でジロリと見廻しますが、百松の外には、そんな事をしそうな人間は一人もありません。

平次はこの試験をおわると、大急ぎで水槽から這い上がりながらこんな事を言います。

「二人の内の一人だ」

「誰と誰？」

と利助。

「お松を水槽から引揚げる時、床ゆかに植えた短刀を抜いて、竜の口へ投げ込んだのだ」

「すると」

「藤六か、清次」

「えッ」

「藤六は自分の米櫃こめびつを殺す筈はない」

「それでは？」

そこまで解るうち清次は待っていませんでした。隙を見てヒラリと舞台から飛降りると、宵の闇へ。

「待て野郎ッ」

不意に、木戸に隠れていたガラッ八、飛出そうとする清次の後ろから、無手むずと組み付きました。

先刻水槽に入る時、平次は眼配せ一つで、ガラッ八をここへ廻して置いたのでした。

「さすがは銭形の親分だ、親分が行って下さらなきやア、もう少しで飛んでもない事になるところだった」

述懐するともなくガラッ八。

「まア、そう言うな。今晚の下手人を捕えたのは、お前の腕っ節じゃないか」

平次はこの忠実な子分の肩を叩きました。

「そう言ってくれるのは有難いが、どう自惚うぬぼれたって、あっしの手柄とは思えねえ、——ところで親分、清次が何んだってお松を

殺したんでしよう」

「お松は名題の浮気者だ。清次と夫婦約束までしたのに、近頃お村と張合って、原庭はらにわの才三という色師に熱くなっているからよ。同じようにお松に気があっても、清次は百松のように諦められなかつたんだ」

(編注)

作品中には、身体の障害や人権にかかわる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

挿絵―萩 柚月

初出―「文藝春秋オール讀物號」昭和七年七月号 文藝春秋社

底本―「錢形平次捕物全集」第一卷 河出書房 昭和三十一年五月五日初版

編集・発行 錢形俱樂部



銭形倶楽部

<http://www.zenigata.club/>